も、これによつて幾分でも此の地の過去の事實を明かにしようとする努力に外ならなかつた。併しながら單にかゝる類の書物から得た知識のみでは、到底滿足な結果を得ることは不可能である。こゝに於てか更に進んで多くの新史料を獲得しようとする試みが、相ついで現われて來るのは當然のことである。かくして直接中央亞細亞探檢の幕が開かれて來る。

二　古代の遺跡

謂ふ所の中央亞細亞とは、便宜上支那本部の西、西藏を南にした崑崙山脈の北世界の屋根と稱せらるゝ葱嶺の東、葱嶺より起つて東に延びる天山山脈の南、地理上の區劃でいふ天山南路の地と定める。卽ちタリム河の流を中央に擁した一帶の盆地である。支那の書物に流沙と記せる沙漠が廣く此の間に擴がつて居るから、古來人民の住んだ處は其の中に點在する水草地と、山脈と沙漠との間に挾まれた僅の沃地とに過ぎないが、それでも支那と西方諸國との間に於ける交通は、此の地を經過するより外は無かつたもので、今日なほ昔ながらの隊商のこゝを通過して、諸種の物資の運輸に從事するものが少くない。漢の時代に所謂西域三十六國、後に五十餘國と數へられた諸國は、皆此の間に位したものである。流沙といふ名は此の沙漠の砂が流動するによりて與へられたものである。如何なる理由によつて然るかは、今日尙種々の說があつて一定しないやうであるが、兎も角中央に横はる沙漠は、常に緣邊に向つて其の沙土を擴げて行く。それで昔は三十六國とか五十餘國とか數へられた諸國の中、尙今日に存するものは甚だ少く、空しく沙土の下に埋められ、その存在するものも、同じく砂の侵入によつて多くは位置を變へて